

+ 4 0 【ばったら】

ぼくの村は（他の村もそうだろうけど）お祭り好きで、春夏秋冬お祭りをします。

その他に、豊作を願って、飲んで歌って踊ったりもします。

ばたらばたらばったらよ
大山神よ中山神よ小山神
ばたらばたらばったらよ
大川神よ中川神よ小川神
ことしも豊作たのんます
ばたらばたらばったらよ

懐爺にいわせると、【ばったら】とは豊作の神様で、ときとしておばけになるという。

その「ときとして」はどんなときかというと、田んぼや畑の農作物を盗む者が、あとをたたないときだそうです。

ぼくも大根や胡瓜やさつま芋を盗んだことがあるので、おおきなことはいえませんが、村びとにとって田んぼや畑は、命の次に大切なものなので、なかには命以上に大切だというひともいるので、農作物を盗むのはとてもわるいことなのです。

その年はどういうわけか、農作物を盗むひとが頻出（ひんしゅつ）しました。

それで【ばったら】がいっぱいでした。

【ばったら】の姿を簡単にいうと、大根のおばけだったり、胡瓜のおばけだったり、さつま芋のおばけだったりします。

人間よりも巨大な、大根や胡瓜やさつま芋を連想してください。

「なんとかならんかのう」

いつまで経っても【ばったら】が消えないので、農家のひとになりかわって、懐爺に相談してみました。

「金ちゃんは【ばったら】が消えたら、また大根や胡瓜やさつま芋を盗

むつもりなのでしょう」

懐爺にはかなわん。

「わしのいえは、のうかじゃないでのう。やさいがふそくしとる。たまにはやさいもたべんどのう」

母親は村の中学校の掃除婦をしています。

「それなら農家のひとにいえば、金ちゃんならただでくれますよ」

「やさいくれ、ただでくれ、いうんかのう」

ぼくは渋りました。

そんなこといえるくらいなら盗みはしない。

「そうではなくて、おたくの野菜が見事だから試食（ししょく）させてもらえないか、というんですよ」

「ししょくたあ、なんじゃ」

「味見でしょうかね」

「あじみかい。それはめいあんじあのう」

それで近所の農家に行って、

「おたくのだいこんはみごとじあのう。わしにあじみさせてくれんか」と頼みました。

けれども相手は首をふって、

「【ばったら】大根じゃったらええよ」

と意地悪をいう。

「【ばったら】だいこんはくえるんか」

「【ばったら】大根はでかいからな。喰いでがあるぞ」

「そうかい。ならばわしは、【ばったら】だいこんをいただくでのう」

そういいのこして、また懐爺のところに行きました。

「【ばったら】だいこんは、くえるんかのう。うまいんかのう」

そうきくと、懐爺は頭を抱えて、

「【ばったら】大根を喰うなんて」

「くえんのか」

「喰えます喰えます。でも【ばったら】大根はやめて、【ばったら】南京豆くらいにしておいたほうがいいですよ」

「なんきんまめはきれいじゃ。げりするでのう」

「しかしあんな大根喰ったら、下痢どころではありませんよ。お腹が爆発（ばくはつ）しますよ」

「ばくはつするかどうか、くってみなけりゃわからんじゃろ」

「それなら【ばったら】大根の、葉っぱだけにすればよろしいですよ」

「はっぱだけかい」

と文句をいいながらも、葉っぱだけにすることにしました。

「おい【ばったら】だいこんよ。おまえのはっぱをくわせろや」

大根畑で、【ばったら】大根にいいました。

「もしかして金ちゃんばったらかい。あいかわらず莫迦ばったらいっとるな」

「だめならだめと、はっきりせいや」

「駄目ばったら駄目。なぜばったら、葉っぱ喰うばったら風邪ひくばったら」

「それはかわいそうじゃのう。ならば、しっぽをくわせろや」

ぼくは妥協（だきょう）しました。

「尻尾ばったら、問題のうばったら。それでも金ちゃん、喰ったら尻尾はえるばったらよ」

「わしにしっぽがはえるんか。それはおもしろいのう」

というわけで、【ばったら】大根の尻尾を喰いはじめました。

「金ちゃん助けてばったら。くすぐったくてたまらんばったら」

「かんねんしろや。がまんしろや。もうすぐくいおわるでのう」

しかし当分喰い終わりそうもありません。

「たまらんばったら。助けてばったら。金ちゃんさらばばったら」

というなり、【ばったら】大根は、すたこらさっさとどこやらに逃げてしまいました。

後できいたら、このとき、他の【ばったら】もみんな逃げてしまったそうです。

数日経って、本当にぼくのお尻に尻尾が生えてきました。

犬の尻尾でもない、猫の尻尾でもない、鼠や栗鼠（りす）のでもない、まるで悪魔（あくま）の尻尾が。

「かいじいよ。なんとかせいや」

というと、懐爺はお腹をかかえて笑って、

「金ちゃんお似合いですよ」

「やっぱりはっぱにすればよかったのう。はっぱならば、はねがはえたじゃろうに」

「いえいえ、羽根ではなく、髯（ひげ）がはえたんですよ、わたしは金ちゃんの髯づらの顔が見たくて、そう進言したのです」

「たしかにひげなら、しっぽよりはましじゃのう」

「まあ心配しないで。【ばったら】たちも逃げたことですし、しばらくすれば尻尾は消えますよ」

「しばらくたあ、どれくらいじゃ」

「ええと、ええと、一週間」

けれども尻尾が消えたのは、一か月後でした。

懐爺はたまに鯖をよみます。